プロット
「憧れと愛」
校正３
エリー

プロット

＜1＞
Ａ子は、体の弱い幼稚園児。
すぐに疲れてぐったりしてしまう。
部屋の隅っこでよく眠っていた。
大人になったら治るという言葉を疑わずに信じて、なんにでもなれるし、なんでもできると素朴に信じていた。

＜2＞
Ａ子は、兄と両親と暮らす大人しい少女。
Ａ子の両親は、相談なく勝手に決めてしまうので、とても嫌だと思っていた。
Ａ子の兄は、勝手なことをするな！と反発した。すると世話になっているくせになんだ！とケンカになった。
Ａ子は、勝手なことをしてほしくない兄の気持ちも分かるが、世話になっているくせにという父の言い分も分かった。
そんな風に争うのは嫌だと思ったが、「喧嘩ばっかりで嫌だよ！」とわたしまで言いだしたらいけないと思い、耳をふさいで黙っていた。
　いつなら嫌と言ってもいいのか？
　どう言えばいいのか？
　知りたい！

＜3＞
Ｃ男は、兄と両親と暮らす引っ込み思案な少年。
父が母を攻撃するのを兄が止める。
Ｃ男はどうすることもできずに隠れている。
その様子を家の前を通りかかったＡ子が見て、うちだけじゃないんだと思う。

＜4＞
Ｂ男は、人が集まる場所で演説をする青年。
Ａ子は、みんなの前で堂々と反対意見を言うＢ男を見て、この人ならいつなら嫌と言ってもいいのか知っているのではないかと考える。

＜5＞
Ａ子は、みんなから注目を集める有名なＢ男に、自分なんかが質問をしては失礼だと考える。
しかし、今の状態は辛い。
どういったら失礼ではないのだろう？

＜６＞
Ａ子は、憧れのＢ男の行動を観察して、真似ることにした。
どうやら質問をする時には、理由を言わなければ失礼なようだ。

＜７＞
Ａ子のことで、また勝手に先回りして母に決められてしまう。
与えられたものをムダにしてまで自分の意見を通したいわけではないから受け入れてしまう。
わたしは、わたしで自分で決めたかったのに。

＜８＞
Ｂ男の演説をうっとり聞くＡ子。
演説が終わり、人びとが去る。
Ｂ男が一人になる。
駆け寄るＡ子。
Ａ子「あの、反対することと攻撃することはどう違うのでしょうか。理由があるから反対してよいならば、いつでも言っていいのでしょうか。誰でも、自分が間違っていたと思わない限り、意見を変えることはありません。気づきのない指摘は憎しみを生みます。酷い場合には、刃物を持って殺し合いに発展します。
　反対と言うにしても、タイミングが必要だし、誰が言うか立場や関係も大切だと思う。
　信頼関係があって、相手が意見を聞きたがっているなら言うけど、悪事真っ最中の人には自分の身を守るだけで言い返すことはしません。わたしがわたしのやり方を貫きたいように、相手も相手のやりかたを貫くことを認めます。しかし、わたしのことにまで干渉してきたなら、反対せずに逃げて自分を守ります。
　あなたはなぜ反対と言って戦うのですか？」
Ａ子の批判を聞き終えたＢ男は、黙って立ち去り、いなくなった。

＜９＞
Ｂ男は、なぜいつなら反対していいのか教えてくれなかったんだろう？
どうしてわたしを助けてくれなかったんだろう？
こんなに苦しいのにどうして！
Ｂ男が憎い！

＜１０＞
Ｃ男の家の前を通るとまた喧嘩している様子が見える。
Ｃ男が助けを求めて窓の外を泣きそうな顔で見ている。
Ａ子はＣ男の弱々しい様子にイライラしてしまう。

Ａ子「泣いたって誰も助けてくれないよ！」
思わず声に出して言ってハッとする。
Ｃ男がＡ子を見てニッコリ笑った。
意地悪言ったのに笑うなんてどうしてだろう。
懐かれて面倒なことになりそうだから逃げることにした。
（わたしだって無視されたんだから、Ｃ男だけ幸せになったらずるい。だからわたしはもう答えない）

＜１１＞
Ａ子は自分で答えを探すことにした。たくさん本を読みました。しかし、答えは見つかりません。
いつなら嫌って言っていいんだろう？
嫌なことされても嫌って言えないのは辛いから、誰とも関わりたくない。

＜１２＞
Ａ子は、少女から大人になりました。心を閉ざして、誰とも口を聞きませんでした。
そして、Ｂ男と再会しました。
Ａ子「どうして反対していい時を教えてくれなかったの？」
Ｂ男「こぶしより愛をなんでしょ？」
Ａ子は、Ｂ男が自分の理由に納得したから何も言わなかったことを知った。
（ああ、反対していい時はないんだ。自分が思う正しいことをひとりぼっちでも貫くしかないなら、反対するより行動する方がいい。否定より肯定を！）

＜１３＞
Ａ子は思った。わたしの憧れたＢ男は、やっぱりすごい人だった。だってわたしは、質問ではなく反論したのに、怒らなかったのだから。Ｂ男の役に立ちたい。必要とされたい。

＜１４＞
Ａ子は、Ｂ男のように誰にでも堂々と自分の意見を言える人になりたいと思った。
しかし、意見を言うことはとても負担で、激しい動悸が収まらない。辛いと感じる。
でも、好きになってもらうためには、そうしなくちゃ。
そして、わたしも有名にならないと！

＜１５＞
Ａ子は、掲示板でいろんな人に話しかけて、意見交換をして、何時間も話し続けた。
うまくいくこともあるし、うまくいかないこともあった。
自信を持つこともあるが、どうも自分は抽象的な話は理解できないようだと気づく。

理路整然と結論から筋道を立てて主張することを苦手とする。
得意なのは、具体的な場面を設定して、いろんなケースについて話し合うこと。

＜１６＞
Ｂ男のなんでもできるという励ましの演説を聞きながら、自分はまだ頑張りが足りないのでは？と自分にダメ出しするＡ子。
いつまで頑張ればいいんだろう？
どうしたら認めてくれるんだろう？

＜１７＞
Ａ子は、病院で病気だと言われる。
もうわたしは役立つ存在になれない！
何もできないのにＢ男のそばにいるのは辛い。負担になりたくない。

＜１８＞
またひとりぼっちに戻ったＡ子は、Ｃ男がどうなったのか気になりました。
まだ泣いているのかしら？
大人になって、強くなって、幸せになったのかしら？
どうしているだろう？

＜１９＞
どうしても気になって、Ａ子はＣ男の家のそばにいきました。
Ｃ男は大人になっていました。Ａ子を見つけるとまたニッコリ笑ってくれました。
Ｃ男「どちらさまでしたっけ？」
Ａ子「昔、この近くに住んでいたものです。ちょっと懐かしくて」
Ｃ男「もしかして、僕に声をかけてくれた女の子？」
Ａ子「あのわたし、ごめ・・」
Ｃ男「やっぱりそうだ。僕嬉しかったんだよね。みんな見て見ないふりしていたのに、あなただけは声をかけてくれたから」
Ａ子「そんなんじゃない。そんなこと言わないで」
Ａ子は、ずっとずっと泣くのを我慢していましたが、声を上げて大泣きしました。
Ａ子が泣いている間は、Ｃ男はＡ子の肩を抱いていました。
Ａ子「ありがとう。もう大丈夫」
Ｃ男「また会える？」
Ａ子「わたしは人の負担にしかならない存在なのよ。会っても意味なんてないわ。ううん、会わない方がいい」
Ｃ男「ずっとずっと待っていたんだ。やっと会えた大切な人なのに、もう会えないなんて悲しす

ぎるよ。僕が泣いてもいいの？」
Ａ子「え！？」
Ｃ男「嫌だよね。そしたらもう会うしかないよね」
Ａ子「会ってどうするつもりなの？　わたしは病気で役に立つことは何もできないのよ」
Ｃ男「何もしない。君の瞳をぼんやり眺めて過ごす」
Ａ子「そんな役に立たないことして何になるの？」
Ｃ男「幸せな気持ちになる」
Ａ子「？？？」
Ｃ男「今、ここに愛する人がいるんだなって思って嬉しくなるの。あなたがいて、僕がいるのが愛でしょ？」
Ａ子「分からない。そんなのが愛なの？　相手のために何かすることが愛じゃないの？　わたしにはもう何もできないけれども」
Ｃ男「そういう愛もあるかもしれないけれども、僕はそばにいられたらそれでいいんだよ。だからまた会ってくれる？」
Ａ子「分からない」
Ａ子はＣ男からまた逃げ出しました。
Ｃ男「待ってるから！」

メモ

この後、Ｃ男と繰り返しあって、だんだん癒されて再生していくんだけど、問題はそこじゃない。
Ａ子は、なぜ役立つことが愛の証だと思っているのか？

Ｂ男は、Ａ子にとって自分とは違う存在。だから声をかけられたい。
Ｃ男は、Ａ子にとって自分と同じ存在。だから気になる。手を差し伸べたくなる。
だからＢ男は演説をする年上の青年で、Ｃ男は身近な年下の少年という設定になった。

Ａ子は、反対していいときがあると思っている。
だから、どんな時なのか教えて欲しいと思っている。
ところが、撃てば増えるパラドックスで意味はないと否定されてしまう。
自分が正しく、その先を問い、答えを出すことを求める立場に立たされたら？
誇らしいような、そんなの無理だって戸惑うような、複雑な気分。
できる！と思う時と、無理！って思う時が交互に来て、情緒不安定。

改めて、自分の説が正しかった場合、何が言えるのか考えてみよう。

そんなの間違っている！と王政を倒したフランスが本格的に変わったのは、技術革新で鉄道ができてからだと聞いたような気がする。
馬車で農作物を運ぶのは、時間がかかるし、少ししか運べない。
だから、余っていても商品として売ることができなかった。
でも、鉄道ができて、田舎で作ったものを都会で売りさばけるようになったら、お金が入って、自由が拡大していったという。

コンテナもそうだ。
もともとは、バラバラなサイズの荷物を手作業で積み込んでいた。
紛失することもあるし、盗まれることもあった。
ものすごい時間もかかった。
コンテナにいろんなものを詰めていたのを、同じ行き先の同じ商品を大量に詰め込むのが最も効率的と発見して、賃金の安い地域で作るグローバル経済が生まれた。

鉄道は、レールを敷かないといけない。
コンテナは、港を作らないといけない。
鉄道は知らないが、コンテナはそんなの無意味だと言われていたそうだ。
しかし、今ではコンテナなしでは考えられない。

わたしは、やっぱり反対していい時はあると思う。
悪い状態にあるが、それを認めない時、悪い状態だ！と知らしめる必要がある。

リーダーというのは、群れで一人だ。
もし、リーダーをやめさせられても、一般人として生きることができる。
だから、交代させることが可能だ。
悪行に対して、Ｎｏと言うことが必要な時もあるだろう。

個人は交代できない。
わたしは、わたしをやめることができない。
「そのやり方は問題だ！」と他人が口出ししてやめさせて、「〇〇しなさい！」と命じることは支配することだ。
失敗すると分かっていて、失敗させないといけない時もある。
それは難しいことだ。

あるいは、他人に被害が及ぶ行為なら？
やるに任せるわけにはいかないから、止める必要がある。

支配しないで、自立を認めることは、難しいことだ。
自分から秩序を持ちたいと望み、律した行動をとるならば、自立を認めても問題は起きない。
しかし、秩序を望まず、堕落した行動をとるならば、自立を認めれば破たんする。

１３歳から１５歳で寮生活をして、工場勤務をするのは、秩序を望み、自制心を持って行動する資質を選別するためにある。
秩序を望まず、堕落した行動をとる人には、自由区に追い出して自由を与える。
その結果、行き詰って死を選ぶしかなくなったなら、死の街で死ぬ自由がある。

批判を恐れて、肝心な部分は書かずにきたが、全員を生かす設計になってない。
自由区は、若者と成功者の街で、失敗した老人は死に場所を用意するだけの設計になっている。

レンジャーは、屈強な男女。
山奥の保護区で修行生活は、信仰心のあつい男女。
平地の保護区は女性が中心で、子どもを生み、育てつつ、基幹産業もする。助け合い。負けを作らない。

都市部の自由区は男性が中心で、新しいことに挑戦して切磋琢磨する。戦い。負けがある。

女性は子どもを産むし、自分の子どもを育て終わっても、他人の子どもを預かる仕事が待っているので優遇する。
しかし、女性だから子どもを産まなくてはならないわけではない。
男女共に自由区に出て、好きなことを自由にして、成功したなら手厚い介護を受けられるし、失敗したなら死の街で死ねる。
自分の血を残すより、国全体として人口が維持されればよいと考える。

自由区で成功した人から保護区を維持するお金を取り、自由区での発言権を与える。
そして、保護区を維持する。
その意味するところはなにか？
生物的性別ではなく、資質としての男女で考えた場合、自由区は積極性をあらわす男で、保護区は消極性をあらわす女。
「男が女を食べさせる」という仕組みを、家族を解体して、国家単位で組織的に行う。
すると、男性でも子どもを育て村を守ることに力を尽くしてもいいし、女性でも自分の才能を思う存分生かしてもいい。

たとえば、女性が自由区に出て、子どもだけ産んで、保護区に預けてもいいわけだ。
でも、多くの女性は、自分の子どもを自分で育てたいと思うだろう。
そういう場合の受け皿が平地の保護区。

自由区は競争社会だから、誰でもできる仕事は安い。
運と才能があって成功しないと、自分の稼ぎで子どもを育てることは困難だ。
それが今の状態。
成功した男女しか子どもを持てないでは困る。
なぜなら、仕事に専念して子どもを持たないという選択肢を選ぶことだって考えられるからだ。
産みたければ、誰でも産める状況を作るためには、保護区のような「家庭の役割を果たす場所」が必要だと考える。

かつては、家が職場だった。
だから、働くことと子どもを育てることは区別がなかった。
ところが、働く場所が会社にうつって、子どもを育てることと別になってしまった。

確かに、仕事だけする場所にした方が都合がよい。効率的だ。
それなら、家庭だけする場所があってもよいのではないか？

もし、どんどん変化していって複雑化する現実から最低限をあぶり出してシンプルに簡略化することが必要なら、個別化した家庭機能をまとめて集団の力で維持することが足りないものだと考え保護区を提案する。

最初の問いに戻るけども、Ａ子はなぜ役立つことが愛の証だと考えたのか？
生きる意味を問うからだと思う。
やりきったと思える人生を送りたいから、何かをしたいと思う。
その何かが何なのか分からないから、分かってそうな人を手伝うことを望んだのでは？

自分で自分の生きる意味を作ることは結構難しい。
目指してきたものが、事故や病気でダメになって、生きているだけで精一杯になった時、頼りにしてきた価値を失ってしまう。
理由がある意味は、理由が成立しなくなれば崩れてしまう。

Ａ子は、Ｂ男のようにダメなことにダメと言える立派な人になりたいと憧れた。
だから、あなたが正しいと言い勝っても、反対しなければならない時はあるのでは？と疑問に思い続ける。

それでもなんとか好かれたくて気に入られようと努力するが、努力してはいけないと分かって心が折れてしまった。
そして、自分よりダメなＣ男を思い出した。
自分よりダメなＣ男が幸せになったなら、自分もまだ生きていていいと思えるかもしれないから？

ところが、Ｃ男はＡ子に理由のない愛を与えてくれた。
ダメだなやつだと思っていたのに、最も強い心を持っていた。
だから、Ｃ男に会うたびにだんだん癒されていく。
生きていていいのだと思う。
あいつよりましだからいいのだ！という否定的な肯定ではなく、全面的な肯定感を得た。

グリーン教は、生きることは素晴らしい！と教える。
新しい神イエローの細胞としての人生をまっとうすることが大切だと考える。
何をすることがイエローの役に立つかは分からない。

なぜなら、誰も神さまをみたことがないからだ。
あるべき姿を知らない。
それならば、好きに生きて、好きに死ねばいい。
ただ、死に絶えることだけは避けたい。
そう考えているのかもしれない。

好きなことして輝いている自分を夢見て、挑戦するのもいい。
でも、挫折したなら？
「人を育て、世話をしたから世話される」がするべきことと教えるのがグリーン教。
「好きなことして成功して好きに生き抜く」も認める。
「好きなことして失敗して死ぬ」も認める。

義務を果たしたら、権利を与える。
自由を選んだら、自己責任を問う。

今は、果たすべき義務が用意されておらず、自由を押し付けられて個人戦を強いられている。
それを集団の力を生かす戦い方に変えるためには、職場をまとめるだけでなく、家庭を機能をまとめる必要があると思う。
繰り返しになるが、現時点の結論はそこ。

フラフラ迷って、意味なんてないのかも？と思う日も多いけど、ぼちぼち考えていく。

誰でも、自分には特別な何かがあるのではないか？と夢見る自由はあってもいいと思う。
チャレンジして成功するかもしれない。
だが、何の夢もなく、何をすべきか分からない人に、「これをして」という仕組みがあってもいいと思う。
グリーン教国の中では、イエローの細胞として生き続けることがしてほしいことだから、子を産み育てることが大切だと考えている。
多様な生物が命をつなぐことが、神を育むことだと考える。
その中には、人工生命体も含まれる。